

# 第7回 年次大会の報告

講演会録

分科会発表報告書

2014年度総会報告

## コミュニティ福祉と希望

—私達はいかに希望をつなぎ、育めるのか—

### 【講演者】

高橋 亜美氏

(アフターケア相談所ゆずりは 所長)

高橋 優子氏

(小川町 生活工房つばさ・遊 理事長)

千葉 祇暉氏

(バラエティクラブジャパン 代表理事)



### 【コーディネーター・コメンテーター】

岡田 哲郎

(まなびあい運営委員/福祉学科教員)

**岡田** それでは、講演及びシンポジウムの時間に入ります。私、本学部の卒業生でもあり、本日の企画のコーディネーターとコメンテーターを務めさせていただきます。福祉学科助教の岡田と申します。どうぞよろしくお願い致します。座って失礼いたします。

まず、本企画の趣旨を簡単に説明させていただきます。お手元の資料の趣意文にもある通り、今年度の学内学会のテーマは『希望』です。これがどこからきたかといいますと、昨年度の学内学会は『暴力』、すなわち、社会の仕組みから構造的に生み出される格差、破壊、排除、そうしたものをテーマとしました。いわば、暮らしの基盤が崩れていく現実を直視しようというもので、遡れば前々回の学内学会のテーマである「東日本大震災」にもつながります。「非常時にこそ、常時の積み重ねが露呈する」という震災の教訓がありますが、その意味で、現在私たちが抱える課題は、過去から問われてきたものが放置された結果としてあるとも言えます。昨年度の講演会でお越し頂きました太田道子さんが、「暴力のない社会」など、軽々しくテーマにするものではないと仰いました。つまり、これは人類の歴史上、場所を超え、連綿と蓄積してきた構造であって、それが、あなたの中にも内在しているということを実感しなさいという問いかけでもありました。これは考えるほどに泥沼に入っていくような気持ちもしましたが、しかしその上で、具体的にあなたは何をやるのか？ということ突き付けられたような、前回の学内学会でありました。その点、今回の『希望』というテーマも軽々しさ

を免れない言葉であります、ただ抽象的な言葉ではなくて、ここでは、具体的な実践の後に構築されてくる『希望』だと、まず捉えたいと思います。

先日も川内原発が再稼働かというニュースがありましたが、まるで福島や東北の震災などなかったかのように、利益のためなら何をして構わないという社会を見せつけられているようです。しかし、そうした大きな流れがある一方で、別のベクトルの社会づくり、「もう1つの価値」はありうるのではないか、いわば、『暮らしの基盤を取り戻していく』実践を具体的に行っている3人のゲストの方に今日はお越し頂いております。これは私たちコミュニティ福祉学部が今は3学科に分かれています、それぞれに育んできたものを、ある面で代弁して頂き、各学科の原点を再確認したいという意図でお越し頂いております。

さて、講師の方をご紹介します。福祉学科からは「アフターケア相談所ゆずり」所長、高橋亜美さんにお越し頂いております。高橋さんからは、いわば「子どもは社会を映す鏡」と言えますが、社会的養護の現場、とりわけ施設退所後の子どもたちのアフターフォローをされている立場からのお話を頂きます。

続きまして、コミュニティ政策学科からは高橋優子さん、「生活工房つばさ・遊」の理事長でおられます。昨今グローバルという言葉が流行ですが、ローカルなきグローバルは収奪・支配の現実につながる。その点で、人と人、そして人と自然との関係、私たちの暮らしの基盤にある「地域」について、そうした根本のことを考える時間ともなるかと思えます。

最後に、スポーツウェルネス学科からは、千葉祇暉さんです。千葉さんは元パラリンピックアスリートであり、また、中途しょうがいの当事者の経験もお持ちで、さらに現在は「バラエティクラブ・ジャパン」など3つのNPO法人を運営されています。これらのご経験は全て「共生社会の実現」につながるものであり、アスリートの視点、あるいはしょうがい当事者の視点から、今、どの位置に私たちの社会があるのかという示唆を頂けるのではないかと思います。

このように、各領域からかなり幅広いお話をお聞きできると思いますので、論点を1つに絞って、深めていくというやり方ではなく、お互いの実践をクロスオーバーさせていく中で新しい発見を見いだしていく、まさに「まなびあい」の場だと捉えて、進めていきたいと思えます。進行は全体で2時間、まずは各講演者の皆さまに20分ずつお話を頂きます。そのあとに、私の方から3人のお話をどういった関連で捉えていくか、少し整理する時間をとらせて頂きます。そして、各講演者の方から、お互いに影響を受けた部分、伝えたりなかった点を補足頂いた上で、最後にフロアの皆さまとの質疑応答の時間をとらせて頂きたいと思えます。本来ならばおひとりずつ、丸々2時間はお話し頂きたい内容です。その点で、お伝えできるものはエッセンスだけかと思えますが、そうしたはがゆさも受けと

めて、お聞き頂けたらと思います。

以上のような進んで、1998年に創設され、今は3学科に分かれている本学部も、根底でつながっていることが表現されるのではないかと思います。皆さまも、各実践をそうしたつながりの中で捉えて、1つでもヒントを得ていただければと、短い時間ですが、一緒に作り上げて頂ければ幸いにございます。

それでは、講演の時間に移りたいと思います。講演内容は、基本的に自由にお願いをしておりますが、共通して、各々の現場からどのような構造的な問題・社会的な壁が見えるのか、また、それを日々の実践の中でどのように乗り越えようとしているかに焦点をあてて、お話し頂きたいと思います。まずトップバッターに、福祉領域から、高橋亜美さんにお話を頂きたいと思います。よろしくお願ひ致します。

**高橋亜美** 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、「アフターケア相談所ゆずりは」で所長をしております高橋と申します。今日は福祉の分野が色々ある中で、私、いつもお話しさせて頂く機会を頂いても、児童福祉とか社会的養護とか、すごく狭い限られた中での話が多い中で、今日は本当に異業種の、違う活動をされている立場の方々との、こういったお話の機会を頂けることを、大変ありがたく思っております。20分という非常にタイトな時間ではありますが、私どもゆずりはの活動、その前に社会的養護で育つ子どもたちが、退所後どれだけ大変な状況の中で、何とか生活しているのか、どんな支援が必要であるかも含めて、お伝えできればと思います。

まず、この黄色い追加で配られた資料はゆずりはのパンフレットになりますので、またご覧ください。そして、このパワーポイントにもあるA1のレジュメが資料になります。アフターケア相談所ゆずりは自体は、今年で開所して4年目の相談所になります。社会福祉法人子どもの家が運営母体となって、2011年に開所しました。同じ法人が運営します自立援助ホームという、15歳から20歳までの子どもたちが外で働いて生活する児童福祉施設があるんですが、私はそこで9年ほど若者たちと衣食住を共にしながら、支援をさせて頂いておりました。

そもそも、ゆずりはの開所に至る道のりの中で、私が、その自立援助ホームで出会ってきた子どもたち、児童養護施設同様に、ほとんど全ての子どもたちが虐待環境の中…虐待という言葉が少し大げさだとしたら、不適切な養育環境の中、子ども時代に子どもとして伸び伸びと生活できたという経験はほとんどないような子どもたちが、自立援助ホームに辿り着いて、そこで何とか生活を始めていく。そこで支援をさせて頂きながら、入所してきた頃は、本当に「大人なんか信用するもんか」「どうせ、おまえたちも今まで出会った大人たちと一緒にだろう」とか、「社会は、もう自分たちの敵だ」というような子どもたちが、共に生活を歩む中で、

本当に変わっていく姿を見せてもらってきました。そして何とか、人と人との信頼関係を築いて、仕事も何とか続けられるようになって、それこそ退所していった子どもたちが、退所後、みんな順風満帆に幸せに生活できているかという、全くそうではない現状を目の当たりにすることになりました。

うちのホームは開所して今年で26年目、150人ぐらいの退所者がいますが、笑顔で見送った退所者の中に、自殺して亡くなった子や、今現在も刑務所で服役している子、ホームレスになったり、女の子は水商売や性産業の仕事を選んだりであったり、自分が一緒に生活してきた子どもたちが、退所後、とても大変な状況になっているということ、そして、そういった状況に陥っているのは、私のホームを退所した子どもたちのみならず、他の養護施設、自立援助ホーム、里親家庭を出た子どもたちも非常に大変な状況の中で生活している。または、どんな状況で生活しているのかも分からない。今どこに住んでいるのかも分からない。そういった現実が見えてきました。

私たちがアフターケアという、退所後の支援をもっと真剣に考え直さねばならないと思った時、ちょうど年越し派遣村の活動がありました。派遣切りなどで若年ホームレスの問題がすごく顕著に出てきた時期でもあって、施設を退所して外部の支援団体に辿り着いた子どもたち、ホームレス支援であったり、DVや性被害を受けて保護施設に辿り着いたり、そのように、他の活動をしている支援団体の方々から、「施設で支援している職員の人たちは、施設を出た子どもたちが、どんな大変な状況になっているか分かっていますか」みたいなことを突き付けられることが、たびたび起こってきました。

婦人保護施設への入所率は、社会的養護のもと巣立った子どもたちの割合が、東京都でいうと、約6割といわれています。それから、ホームレスの支援の中でも、実は養護施設出身、里親のもと巣立った子が少なくないということも、お叱りというか、そういった声が私たちの下に届いてきました。

そういった中で、施設の入所中にどんな支援ができるのか。施設で育つ子どもたちは親や家族に頼ることができない、そういった親や家庭の後ろ盾がないからこそ、退所後に大変な状況に陥らないために、学歴であったり、資格であったり、そういう支援の充実、入所中の支援をもう一度考えること、構築していくことがまずは一点あるんですが、その一方で、大変で当たり前じゃないかと、退所後も大変な状況に陥ってそりゃ当然だ。そうなった時に、すぐに「助けて」と言える支援が必要、助けてと言える場所や人があるということ、同時に作っていかないといけない。

本来ならば、退所後も自分の施設の出身者が困った時には出身施設がその支援を担っていくというのは、児童福祉法の下でも一応確保というか、法律に定められてはいるのですが、そのための人的配置であったり、そこに費やせるお金や時

間であったり、その状況を見ていくと、結構、絵に描いた餅のような制度もあつたりします。そこで、誰がやらない、誰がやってないという犯人捜しというより、やれる人がどんどんやっていく、作っていくしかないという思いで、このゆずりはを作りたい。まず、とにかく「助けて」と言える場所を作りたいんだということで、法人にかけ合って開所してもらうことになりました。

今年度で4年目の活動で、去年から微々たる額ではありますが、一応東京都から「地域生活支援事業」という名目で運営費の一部を補助金で頂いています。しかしその補助金の額もまだまだ十分ではないので、経営的、運営的にはいつも火の車の状態ではあります。このゆずりはを開所する前に、とにかく私たちは、この事業はきちんと税金をかけて公的な事業としてやっていきたいという思いがあつたので、東京都や厚労省などに私たちがやろうとしているアフターケアの支援事業にお金を付けてほしいということを何度もかけ合っていた時に、いつも追い返される文句で言われていたのが、「ゆずりはがやろうとしている支援というのは、今、既存にある支援で全部賄える。やれていますよ、高橋さん」という言葉でした。例えば、ホームレスに関してはホームレスの支援団体もあるし、生活保護の窓口は各自治体にある、DVや性被害にあつた子は女性相談の窓口があるし、婦人保護施設があるし、女性のシェルターもあると。借金や何かでだまされたり宗教問題であつたり、そういったことは、法テラスって知っていますか？安く弁護士の支援が受けられる制度がありますよ。だからゆずりはさんでやろうとしている、やりたいと言っている支援は全部あるので大丈夫です、みたいに言われて追い返される。他のスタッフと一緒にいつもお話しにいて、追い返される前にもっとワーワー言っただけなんですけども。

そんなふうにも言われても、結局、一番支援を必要としている人たちが、その支援窓口に辿り着いていないし、一度そこに相談に行っても、結局適切な支援につながっていないから、退所者の中にホームレスの子がいたり、私の支援していた子が、今も風俗で働いていたり、自殺する子も出てきたり、死にたいという電話が何度もかかってくる、そういうことがあるんじゃないんですかと。ある、あるっていても、それが結局、本当に困っている人に活用されていない。ゆずりはでやりたい支援っていうのは、私たちがお金を給付するとかシェルターの運営をすとかではなくて、今ある支援を必要な人が知る、適切に活用するための橋渡し役、パーソナルサポート的なことを担いたいんだということ、いつも訴えてきました。

資料の一番後ろに、昨年度、2013年度のゆずりはの支援内容、相談件数等のグラフを並べてあるので、またご覧ください。その中に、生活保護の申請であつたり、自己破産の手続きであつたり、DVの相談であつたり、中絶ですとか、妊娠している方の相談がとて多く、諸々私たちが支援している内容が書かれています。

では、施設を退所した方たちが何故一般家庭の方たちよりもそんな大変な状況に陥りやすいのかというと、自立に伴い背負わされるハンディ、目に見えないハンディというものを、施設の退所者の方たちは皆さん抱えています。厚労省の発表では、施設入所者のうち、被虐待児の割合は約6割といわれていますが、私たちの実感としては100パーセントです。本当に大変な子ども時代を受け入れてきた方たちが、目に見えない大きな、深いトラウマを抱えて、そのトラウマというのは、5年たったら、10年たったら消えてなくなるものではなくて、その方たちが、みんな、一生そこに向き合っというか、内在して生きていかなきゃいけない。それが、人とコミュニケーションをとる時や、就労する上で、それによって十分なやり取りができないということがあります。

そして当たり前ですが、親や家族を頼れない。これは施設を退所しても、親や家族が激変して良くなるというケースはあまりなくて、それもまた親や家族への、もっと手厚い支援というのが必要なんですけども、施設を退所して、家族のことはもう一切頼ることができない。そして頼ることができないから、とにかく収入を得て生活を維持していかないと、自分が働けないと、たちまち生活は破綻するといった、本当に緊張状態の中、崖っぷちの所に立たされながら、いつも生活を強いられています。失敗する機会はないです。失敗したら、たちまちホームレスです。立ち止まって、もう少しステップアップのために何かを学びたいとか資格を得たいとか、そんな時間もお金もありません。そういった中で、とにかく生活を維持していくために生活する。そしてさらに言うと、低学歴や無資格といった、いろんな負担が重なって生活困窮に陥る、色々な問題を抱えざるを得ない状況にあるといった特徴があります。

残り時間も僅かですが「ゆずりは」の映像を持ってきたので、少しどんな感じかご覧頂きます。相談所は武蔵小金井駅から10分くらいの所にありますが、ここに相談者がワッと押し寄せるといえることはないです。皆さん、ほとんどお金もありませんし、電車に乗ってここまで相談に来るといって、そこのひと手間はとてもハードルが高いことなので、相談は電話やメールでもらうことがほとんどです。私たちが必ず出向きます。近くの駅の所まで行って、喫茶店とかで待ち合わせをして、何に困っているかの話を聞かせてもらって、支援をさせていただきます。片道数百円という電車代一つでもとても負担になるので、そういった配慮からも、私たちが出向くという支援を中心にやっております。

次のスライドです。これは養護施設の高校生の子どもたちに「失敗していいんだよ」「困ったら、すぐ相談に来て」という種まきの支援をしています。家賃が3カ月滞納になってから相談するのではなくて、1カ月滞納しちゃった、もうやばいみたいになったら、すぐ相談してね。そういう状況に陥ることは全然恥ずかしいことでもない。みんなで助けてって言うてくれることが、これからのアフ

ターケアの支援がもっと充実していくことや、変わっていくことにつながっていく。だから、「助けて」って声を上げてくれることは、本当にありがたい、ありがとうねと言いながら、いつも支援をさせてもらっています。

これは、うちで支援している方の多くが、中卒・高校中退の方たちが多いので、高卒の資格を取るための無料の学習会を毎週実施しています。また、「ゆずりは基金」という、施設を退所した方が、また学校に行きたいとか資格を取りたいという時に使える、完全給付型の就学用の基金も作っています。これは上限が40万円という大きい額でもないので、自動車学校に行くのがせいぜいだったりします。これも、退所した方たちの就労のために必要な就学支援というところで、もっとお金をかけてそれができるようになりたいなと思っています。

次のスライドです。これは、支援している方の中で生活保護受給者の方がとても多いので、うちで色々な仕事を頂いて、ここでおしゃべりをしながらスタッフと共にこういった仕事をして、少しお小遣い稼ぎにもなり、緩やかな労働の場としています。

これは、年に1回、地域の方との交流も含めて、社会的養護のことを知ってくださってという活動をしています。パンフレットも作っています。はい。これは、養護施設の職員の支援というか、施設の子どものための支援のためには、施設の職員が元気であること、元気で働いていることが、子どもたちのまた大きな活力にもつながるので、ここでお酒を飲んだりしています。月に1回とかですが、こんなサロンみたいにして。時々施設長の悪口を言って…（会場：笑い）。

最後のスライドです。私たちが支援をしている人は、虐待を受けて育った、もう大きくなっている子たちですが、突き詰めていくと、虐待をしまっているお母さんへの支援というのは、なかなか具体的な支援が全然ないというのが、この日本ではあるので、虐待をしまっているお母さんたちへの支援の取り組みみたいなことも去年から始めています。

このように、施設を退所してからのアフターケアを通じて、私たちもこんな支援が必要だ、あんなことができたらいいのにと、必要に応じてどんどん広がってきています。あれこれやり過ぎてまた、本末転倒にならないようにとは思っていますが、原点としては、まず、大変な状況を生き抜いてきた方たちの支援をさせてもらう中で、色々私たちが気付かせてもらってということで、こうした活動をさせてもらっています。以上です。

**岡田** ありがとうございます。では、細かな質疑は時間の関係上割愛させて頂きまして、後ほどまとめて質問の時間をとらせて頂きたいと思います。続けて高橋優子さんのほうから、よろしく願い致します。



高橋優子 先ほどご紹介にあずかりました、埼玉県小川町から来ました「NPO生活工房つばさ・遊」の高橋です。よろしくお願ひ致します。皆さま、ここは志木・新座ですので、小川町というのがどこかお分かりになりますけども、東武東上線の終点になります。このように周りを山に囲まれた、緑のあるところです。私は1989年12月24日に小川町に引っ越してきました。夫の仕事の関係で引っ越してきたんですが、小川を選んだのは、やはり緑豊かということ、そして、歴史がある。たとえば、1,300年の和紙の伝統があって、そして、周囲を山に囲まれた里地里山のコンパクトシティです。

私は、小川町の人口が3万人ちょっとというのも、自分が自分らしく生きていく上でちょうどいいのかなと考えここに家を買いました。家を買って、私が、ここで骨を埋める覚悟をした時に、じゃあ何ができるんだろうということを考えたんですね。その時に出会ったのが、小川町で1971年から有機農業をやっている金子美登さんとの出会いでした。金子さんは、地域の資源を生かして、食もエネルギーも自給する、そういう循環型農場というものを運営されているんですね。また、彼の作る野菜の販売というのは「お礼制」といいます。これは生産物に価格を付けない「贈答」という形で皆さんに野菜をお送りする、その対価としてお礼をいただく、そういうことをやってらっしゃいました。これに私、非常に感銘を受けまして、私自身も、そういう経済のあり方というのを初めて知ったので、これは未来の価値観ではないかと。つまり、私が小川町で何ができると考えたときに、ここでみんなで助け合って、励まし合って、お金がなくても、互いが必要とされて暮らしていける有機的な市民相互のネットワーク、そういうものができないかというふうを考えて、先ほどの金子さんの考えのもとに一緒にお仕事をさせて頂くことになりました。

私が小川町に引っ越してきた時、子どもは0歳、1歳、5歳でした。私が思ったことは、子どもたちに、確かな未来を渡さなくちゃいけないということ。幸せな人生を送ってほしいと願いました。その時も、今もそうですが、世界中で戦争が起こっています。戦争のない、そういう社会を子どもたちに引き継がなくちゃいけない。それじゃ何ができのかって考えた時に、平和の『和』という字は禾編（のぎへん）に口と書きます。つまり全ての人の口に食料がある状態を平和と言うのだと思います。世界中の全ての人に食料があれば戦争は起こらないのではないだろうか、そのためにはどういうことができるのか。持続可能な食料生産方式を世界中に広げていく必要があると思いました。それを実践しているのが金子美登さんでした。だから、私は、子どもたちの確かな未来のためには有機農業を基盤とした地域づくりをしていかななくちゃいけないんじゃないか。それが母親として、親として大人としての役目だろうと考え、有機農業の普及活動を続けていきます。

有機農業の普及ということで、金子さんのお手伝いをさせて頂いてますが、有機農業だけではなくて、暮らし全般を有機的にしたいと思っています。先ほども言いましたように、有機農業が自然と人、人と人との関係を指すものですから、自分の生き方、人生そのものが有機的であるということが、非常に大切な要素になってきます。主婦である私が、どうやって有機農業を普及するのだというところで、皆さんご存じのように、今日本の農業は、高齢化で耕作放棄地が増えています。世界の食料は不足しているのに、日本では、耕作放棄地が増えています。農業の使用で土壌の微生物が死んで耕作不可能な土地も増えています。持続可能な社会、つまり、10年先、50年先、100年先、1,000年先、1万年先にこの地球が地球である持続可能な社会のためには、再生産可能な有機農業を基盤とする必要があります。

そのためには、有機農家さんの生活を安定させることが大事だと考えました。つまり、農家の収入を安定させることです。皆さん今、お米がいくらで買われるか知っていますか？新潟のコシヒカリで、大体、1俵、60キロが8,000円です。1キロ130円ぐらいですよ。いったい農家さんの時給はいくらになるでしょうか。だから、どんどん農家をやめていく人は増えているんです。では、どうやったら農家さんが農業を続けていくことができるのか。私は、有機農業の価値がきちんと評価されることが必要ではないかと考えて、勉強しました。

その1つの事例として、さいたま市のリフォーム会社のOKUTAさんです。OKUTAさんはロハスをキーワードにしているリフォーム会社さんで、とても環境に熱心でした。OKUTA社長・山本氏との出会いがあり、希望する社員の給料の一部をお米で支払うという仕組みを作りました。つまり、地域の企業や市民が地域の有機農業を支援することで地域の環境を守る、コミュニティー・サポート・アグリカルチャー（CSA）です。昔は、武士のお給料がお米だったんですから、その昔の仕組みを取り入れた訳です。

お米を買って頂く時に、「提携三原則」、①全量買い取り、②現金即金払い、③再生産可能な価格（農家さんが来年も作ってもいいよという価格）、この3つを提示しています。お米5キロで送料などの経費込みで2,600円。明細はお米1キロ400円（5kg2,000円）+送料+袋代+精米代等で2,600円です。多分、皆さんがスーパーで買われるお米はキロ400円かと思います。提携米はキロ520円と高く感じるのですが、普通、有機米ってキロ500円から700円ぐらいで売られています。それに比べたら非常に安いです。これは直接農家から買うことで中間マージンを省いているから実現できるのです。

ところで昔と比べて、今の日本の社会において、生産と消費の現場があまりにも離れ過ぎているために、汚染米等という疑惑や事故が起こっています。これを防ぐには「見える化」という方法で、生産者と消費者がお互いに顔の見える信頼

関係を築き、農家の顔が「品質保証」となる仕組みを作ることです。

お米がどうやってできるのか、野菜がどうやってできるのか、知らない方が多くなっているのではないのでしょうか。そうした時に出てくる問題が、時間と価値観の相違です。例えば、皆さんは1年中トマトが欲しいって言いますが、トマトは夏しか取れません。冬のトマトは温室栽培です。石油を使い加温して出来ます。ものすごいエネルギーを使います。すごく無駄なんですね。地球温暖化を促進し、自分たちの食が、どんどん地球を壊していく要因にもなっています。都市にいては気付かないけど生産現場に足を運ぶことによって、それが間違いではないかと気づくんです。農業体験を通して、自分たちができること、市民としてできることは何かということを考えてもらっています。

農家と企業の皆さんとの交流は、本当に少しずつではありましたが、直接顔を合わせることによって、お互いに理解を深めています。農家さんにとっても、消費者の顔が見えるので、頑張らなくちゃいけない、土を良くしてもっとおいしいお米を作ろうとしています。一方、OKUTA社員さんの方も、田んぼへの興味から、本社の屋上に畑を作る等の変化が起きました。丸6年、今年で7年目、今も交流は続いています。

農家の収入の安定と言いましたけども、普通ならキロ100円が400円で買って頂いて、収量は減るけれども価格が4倍なので、有機農法でやったほうがよほど収入は多いし、安定するし、皆さんから感謝されるし、健康にいいしと有機農業は幸せな農業なんです。しかしそうはいいつつも、小川町は有機の里と言いながら、有機農産物を全然食べていないという地元の方が結構多いので、これでは灯台下暗しだね、ということで、2009年の11月14日に、小川の駅前に、小川の有機野菜が主役の、日替わりシェフのレストラン「べりカフェつばさ・游」をオープンしました。これは地域の方に有機農業を知ってもらうため、まずは有機農産物の美味しさを知って貰おうということから始めました。

近所の飲食店などからは「暇なおばさんたちの道楽だ、すぐに潰れてしまうだろう」というふうに噂されていたんですが、おかげさまで丸5年、今6年目にもうすぐ入ろうとしています。私は、この店を開いて良かったと思うのは、『場』があるというのはすごくいいです。ここに行けば誰かが居るとするのは、すごい幸せな事だと感じました。つまり場があるということは、精神安定剤みたいになるんです。

さて、有機農業の推進です。有機農業というのは、地球に何も足しもしないし引きもしない、地球はそのままに存続していく、そういう生産方式です。そうすると、有機農業をずっと続けるため、地域の資源を活用することが大事になってきます。ここからまとめになりますが、おいしいお米を作るためには、栄養豊富な水が必要です。栄養豊富な水は、山が生み出します。山の枯れ葉等を通った水

には、栄養やうまさが入り込んで、川に流れ、川の水が田んぼに入って稲を育てます。そこで今、地域の皆さまと共に里山の保全活動をやっています。

以前、広島ですごい土砂崩れが起きましたよね。あれ、どうして起きたか判りますか？里山保全活動を始めた時に、日本全国で土砂崩れが起こっており、もし里山で木を1本切ったために土砂が崩れ、集落の家が潰れたり人命が失われたら困る。じゃあどうしたらいいんだろう、どうやったら、あの里山を強くして、美しく、豊かにできるのかと、その方法を探しました。その時にやっと出た答えが「直根苗」の活用でした。今売られている木の苗は根を切って成形するポッド苗です。生長点を切った苗なので下まで根がいかず、側根ばかりで成長するほど不安定になって倒れるんです。だから広島のような土砂崩れが起こるのです。「直根苗」を植えれば、ちゃんと、根が土を抱えこんで、強く美しい里山になる。元信州大学の山寺先生に教えて頂いて、この方式でやっています。地域の皆さんと一緒に、「下里里山保全百年ビジョン」を作り、強く美しく豊かな生物多様性に富み、生きとし生けるものが生命輝く環境を作りましょうと活動を続けています。

今、日本の食料自給率は39%です。今の日本の農業は、農機具があってはじめて成り立ちますが、農機具の燃料は石油です。日本の石油の自給率は0.01%ぐらいです。したがって、もし石油がなくなったら日本の農業は成り立たず、食料自給率39%というのは砂上の数字ということになります。持続可能な農業という点でエネルギーの自給も大事になってきます。そこで「農機具燃料の自給化プロジェクト」としてSVO（ストレート・ベジタブル・オイル）事業、つまり、菜の花を栽培し、採油して、その廃食油を農機具に使おうというプロジェクトを立ち上げて、講習会などもやっています。

自分の食べる物が地域の環境を作っている。これ、大事な視点です。農薬や化学肥料を使っていると、地域から生き物（トンボ、ミツバチなどや土壌微生物菌）がいなくなります。ほとんどの野菜・穀物は虫媒によって出来ます。農薬や化学肥料を使わない野菜を選ぶこと、自分が食べるものが自分の未来を作ることにつながる、そういうことを皆さんに伝えたくて、「食農育講座」もやっています。

小川の1,300年前の和紙が、今も残っています。昔ながらの製法で作られた添加物が使われていない和紙です。それを後世に残す「無添加手漉き和紙を後世へつなぐ」という取り組みです。

こういう活動に対して、たくさんの方の企業の方に賛同して頂いています。これは東京のIT企業さんですが、そこのCSR担当を通して、地域の「新規就農者の支援」として提携三原則による野菜の全量買い上げをして頂いています。有機農業をやりたいという若い人が、本当にたくさんいます。その人たちは土を作るのに、最低3年かかります。その間の支援をお願いしたのです。「どうせスーパーで買うなら、新規就農者の野菜を買いますよ」ということで、支援して頂いてい

ます。

私は地域の人、企業、文化、農家、物、金を結び付けて、地域で資源を回し、地域で経済が回る、そのことで地域が豊かになる、そういうコーディネートをやっています。地域の資源から得られる恵みを、皆で分かち合い、関係者それぞれの利益は少なくとも、大きな安心が得られる「小利大安」という価値観を村の人たちと育てています。

これは2011年3月11日の様子（モノがなくなったスーパー。ガソリンが買えずに動かない車。交通機関の麻痺）です。2度とこんなことが起こらないようにしたいものです。

最後のスライドですが、『「自然」と「人」、「人」と「人」の有機的な関係が紡ぎ出す有機農業を基盤とした「食」、「エネルギー」、「福祉」の自立と協働の仕組みを市民自らが創り、石油やドルなどに左右されず、農家と共に農地という生産手段を持たない市民が生産という隊伍の端っこに存在していきたいと思います』。ご清聴、どうもありがとうございました。

**岡田** 高橋優子さん、ありがとうございました。では、最後に千葉さんのほうからお願いします

**千葉** どうぞよろしく申し上げます。散々お世話になった顔ぶれもいらっしゃって、懐かしい顔ぶれもいらっしゃって、20分というお時間で、一生懸命終わらせて頂きます。僕は見てのとおり、車いすに乗っているんですけども、今から33年前、昭和52年の8月に友だちと海に遊びに行きまして、ドボンと飛び込んで、水深を間違えまして、入水角度を間違えまして、腹打ちぎりぎりにすっと行く予定が、地球にゴツンコしてしまいまして。その時、おでこをぶつけていればよかったんですけど、多分、頭が上だったんですね。こうガクッと関節が背後まで入るような形になって飛び込んでしまいまして。結局、しょうがい例でいうと、頸椎の6番目を骨折しまして、それからいまだに、もうおっばいから上5cmぐらいからの感覚がまるっきりない、完全麻痺という形でしょうがいを持ちました。昔20歳までは、バリバリと、白と黒の車に追っ掛けられながら、大好きなことばかりやっていましたが、そんなことができない体になってしまいました。

それで、けがをして、救急車で運ばれまして、幽体離脱まで経験しました。寝ている自分の姿を上から見ていまして、「ああ、かわいそうに」とか思いながら。そんな形で、僕のしょうがい者としての入院生活が始まって、最初は鼻に管突っ込まれて胃を洗うだの、おしっこも、管を突っ込まれてしていました。まず、けがをする前に、僕、友達のおふくろさんが、でかいおにぎりを作ってくれて、それを8個食べたんですね。その8個分に海苔がたっぷり入っていたので、1週間、

胃洗浄ということで、胃に管をやってたんですけど、「おまえ、けがする前、何食べたの？」って言われて。「え。何ですか」って言ったら、「おまえのさ、管、いつも真っ黒になるんだよね」って言われて。よくよく見たら、要はその食べた時の海苔が管の内側に張り付いてまして。まあ、とっさの時に食物のことで考えてはられないなとか思ったんですけどね。そんな形で、僕のしょうがい者としての生活が始まりました。まあ、大儀というか、すごいことしちゃったなあという思いがありました。

僕は、ずーっと親と仲が悪かったんです。ずーっと反抗、反発してまして。それで、おやじにも反抗的な態度を取っていた僕が、20歳のけがをした時に、伊豆の病院におやじが夜中に駆けつけてくれた。僕の顔をスツてのぞいてくれた時に、「おう」って言ってくれた瞬間に、無意識に、なんか涙がでちゃったんですね。それで思わず「ごめんなさい」って言っちゃったんです。あれ、何だろう？この言葉って。自分でもびっくりしちゃったんですけども。それで、おやじが後々「おまえは、ある種、加害者でもない被害者でもない。その点は良かったな」と言ってくれたんですね。けがして歩けなくなっている僕に良かったって言うのはひどいなとか、その時は思ったんですけども。よくよく今考えたら、深い言葉だったんですね。

そこから僕のしょうがい者としての車いすの生活が始まったんですけども、ある日、病院で、電動車いすの人がいて、青森のほうに漁に行つて、時化で海が荒れて船から落っこっちゃって、落っこちた時に首の骨を折っちゃったという人です。僕と同じような頸椎損傷というしょうがい。僕よりもちょっと重いんですけども。で、僕は自分で車いすを漕いでますが、その方は自分で車いすを漕げなくて、電動車いすに乗っていたんです。で、たまたま、いつもだったら看護師さんに頼んでいるらしいんですけど、その時は看護師さんが誰もなくて、僕の所に電動車いすで来て、「ちょっと若者、悪いけど、たばこ吸わせてくんねえかな」って言われて、「あ、いいですよ」って言って、その人のポケットからたばこを取り出して、くわえさせて、火付けてあげて、ふっと思ったときに、「あれ？僕なんかでも、何か人のためにやれることあるんだな」と。その時に、ふと気付いたんですね。これは悲しんでばかりもいられないなと。たかだかなんです。たかだか、歩けなくなっただけなんです、自分の中で。

で、昨年まで、僕は立教大学の大学院で、先生方、それから学生さん達にお世話になりながら、ようやく修士論文を書き上げさせて頂きまして、卒業させて頂いたんですけども。そこで、授業も、先生方からも学生さん達からも、すごく、いっぱいいっぱい、色々なことを頂いたつもりで、その中で「しょうがいの受容」という言葉を教えて頂きました。「きつと、千葉くん、それはしょうがいの受容なんだよね」って言われた時に、僕の中では「受容なんかしてないだろう。冗談

じゃないよ。いつかは歩くぞ」と。今、僕53歳なんですけど、うちの子どもが、やっと6歳なんです。で、子どもは「パパ。いつになったら歩くの？」って聞く。要は、子どもにしてみれば、僕がサボってると思ってるんですね。それからこう、どんどん、サボってるおやじの腹が出てくる。僕3年間で20キロ太っちゃったんです。で、パパの腹は出てきて、自分の体は大きくなってくるものだから、どんどん自分の座る膝のスペースがなくなるわけです。そうするともうパンチくれて、引っ込め引っ込めって腹にやられるんですよ。これあざになってるじゃん？何だ、このあざは。今でならわかりますが、ずっと分かんなかったんです、麻痺してますからね。

そんな体になって、で、リハビリテーションっていうのをやりまして、それでリハビリテーションから、ふと、スポーツにまで気持ちが行きました。「スラローム」という、直線距離を走る、身体しょうがい者のスポーツみたいなものがあるんですけども、その病院の中でやっているスラロームのリハビリテーションが、ペットボトルを置いて、そのペットボトルの間を前から通ったりバックしたり、360度ターンをしたり、色々な手法を変えながら、110メートルの中で争われるんです。それをやっているうちにですね、僕が入院していたのが脊髄損傷専門の方がいらっしゃる病院だったもので、日々、リハビリではなく、ほぼトレーニングになっていたんですね。リハビリの時間が終わっても、まだ、みんな30人ぐらい車いすの若い連中が残っているんです。「あいつに負けたくない、あいつに勝ちたい、今日はこのタイムだったから、明日はあのタイムに…」それには、どうしたらいいかっていったら、リハビリの前とか終わった後にトレーニングしているんですよ。

そうやっているうちに、ふと、自分で今まで上れなかった5センチの段差、10センチの段差、15センチの段差っていうのが上れるようになる。下りられるようになる。角度の急な傾斜が、自分の中で、どんどんどんどん上れるようになる。そうすると、人の手を借りずに色々なところに行けるようになった。僕の友達で酒好きなやつがいて、僕よりもちょっと状態が悪いんですけど、日頃シラフのときは5センチの段差も上がれないんですよ。でも、夕方飲み屋に行く時は、15センチの段差も上れる。不思議なやつがいますね。どれだけやっても昼間は上れないんですよ。結局ね、酒飲み過ぎて、事故っちゃって、その人死んじゃったんですけど。まあ、身を滅ぼしちゃったんですね、酒でね。けがしてまでも、そこまでいなくてもいいと思ったんですけども。

そんな感じでリハビリをやって、競技スポーツに出会いまして、僕は、3つのパラリンピックに行かせて頂きました。1992年のバルセロナ、それから1996年のアトランタ、それから2000年のシドニー。で、その中で初めて…というか1988年のソウルのパラリンピックの時に、出る権利は得ていたんです。ただその当時

は、パラリンピックを県の行政だの都だの、そういうところが支援するんですけど、僕の場合、1986年に1度イギリスの国際大会に行っていたので、埼玉県の趣旨としては、広く浅くの支援だったので、国際大会に1度行ったことのある人は2度は行けなかったんです。それで、パラリンピックとは違う大会といえど、「あなたは2年前の国際大会に行っているのに、埼玉県からは推薦できません」と言われて、すごく落ち込んだんです。けがした時よりも落ち込みましたね。何でパラリンピックに行けないんだって落ち込みまして。こう癩に障りましてですね、銀行からなけなしのお金50万円を下ろしまして、アメ横行ってカルチェのバック買ったりとか…（会場：笑い）。やけ買いしたんですけど、気持ちは全然収まらなかったですね。

それで、その悔しいままに、ただもうちょっとやってみたいと続けているうちにですね、またチャンスが巡ってきました。1991年に、日本で一番大きなジャパン・パラリンピックという大会です。小泉元首相が厚生大臣のときに、しょうがい者スポーツに300億円の基金を付けましたということで、バスケット、陸上、水泳、アーチェリー、それから冬のスキー、日本で最高峰の大会をとということで、1991年に初めてのジャパン・パラリンピックが開かれました。僕、その第1回目の大会の選手宣誓をやったんです。選手宣誓をやって…それもね、大抵、ジnkスっていうのは最初に作っちゃうんですよね。選手宣誓をやった僕がこけちゃったんですよ。それ以来、3回続いて、選手宣誓をやったやつが大会をこけるんですよね。そしたらば、もう、今では22回目ぐらいですが、いまだにジnkスが續いていて、4代目からみんなやりたがらないそうです。

今ちょっと、皆さんに、僕が1998年にイギリスの大会に行った時の動画を見てもらいたいと思います。

----- 当時の映像 -----

これは1,500メートルという競技なんですけども、ヨーロッパなんかでは一番人気がある種目だそうです。いわゆる陸上の醍醐味というのは、スタート、それから中間点での駆け引き、それから最後のラストスパートです。それで、100メートルっていうと、目をつぶって目開いたうちに終わっちゃう。あまり挽回がきかないんです。かといって、5,000メートル、1万メートルっていうと、10分、20分かかる。だけど、この女子の800メートルと男子の1,500メートルは、たかだか3、4分の中に、その面白いとされる内容が全部詰まっているんですね。実際、僕も1992年のバルセロナが終わって、元々短距離専門だったんですけども、車いすの陸上の短距離っていうのは、有酸素運動になっちゃうんです。そうすると、短距離ばかりやっても速くなんないのが、だんだん分かってきたんです。そうすると、中長距離もやっていこうということで、ハーフマラソンぐらいまでは結構いいタイムで走れるようになります。



映像の色が、だいぶセピアトーンになっていますが、これ本当は、きれいなカラーなんです。この中で僕は黄色いヘルメットをかぶっています、といっても分かりませんよね。僕は運よく、1コースに入れたんです。1コースの今、後ろから3番目ぐらい。もうすぐ見えてきます。僕身長170cmぐらいなんですけど、もう彼らはでかくてですね、一番端っこのオーストリアの選手とか196cmありますから。F1でいうスリップストリームですね。大きな背中後ろにいると風が来ないから楽なんです。今、入れ替わりました。で、僕、短距離ランナー出身なので、瞬時にスピードを上げる技術っていうのは、中長距離選手と違ってあるんです。だから、ぐっと1回の漕ぎでスピードがのれるんですね。だから、省エネ対策で、結構走れているわけです。僕ずっと100メートル、200メートルの試合に出ましたから、彼ら中長距離選手にしてみれば、おまえ誰だって感じで、ノーマークだったんです。

僕の中では、全部チェックしてますから、その時、400、800、1,500、5,000、1万、フルマラソン、全部の世界記録保持者がここにいたんです。僕の中ではもう興奮しちゃってるんですよ。トップレベルのやつと一緒に走ってるんだ。うれしくて、うれしくてですね。そんで、最後、鐘が鳴ります。ラスト。最後の周回です。レース用の車いすというのは、大体全長が180センチぐらいあるんで長いんですね。どうやって抜け出ようかなって、色々考えてましてですね。日頃だと、もうそろそろ肩、三角筋に乳酸が溜まって、ああ、疲れた、もうやめようかと、練習ならだらだらやってるんでしょうけどね。こん時ばかりは、楽しくて楽しくてですね。「俺、今、世界のトップと一緒に走ってるんだ」って、走りながら高揚してました。普通ならアドレナリンが出てから出発するんでしょうけど、僕の場合は走ってからアドレナリンが出てきたというような感じです。楽しくて楽しくてですね、この時の気持ちは、いまだに忘れないです。これは時速にしたら、今、24・25キロですね。24・25キロがどれくらいかっていったらば、50ccの原動機付きのバイク、原チャリというやつが法定速度30キロですから、それより5キロしか遅くない。要はママチャリ、僕らだと結構、必死にこがなきゃいけないぐらいのスピードですが、ここでもうラストスパートですね。ここに、ふと隙間が開いたんです。この辺からなら、トップスピードでならば自信がある。この時の僕の気持ちといたら、わーい、今、俺、世界のトップを走ってる！とか思いながら。どうしよう、勝ったらインタビューで何て答えようかなって(会場：笑い)。そしたらですね、だんだん、音が近づいてきましてですね、「あらっ」と思ったら…僕、自分が短距離ランナーだということをすっかり忘れていたんですね。僕の中で300メートルって、とんでもないロングラストスパートだったんですね。もう三角筋の乳酸がパンパンで、もう漕ぎたいんだけど、漕げないんですよ。そしたら、後ろからスウェーデンの、この時の1,500メートルの現世界記録保持者

がやっぱり来まして。で、チョロッと私今、後ろを見て、自分が2位だという、いやらしい確認をしまして（会場：笑い）。もう、へろへろのままゴールしたんですけど。はい、すいません（会場：拍手）。

こんなのがあって、僕の中でパラリンピック、世界選手権に行った時に、最高の思いができたんですね。この最高の思いができたので、やっぱりスポーツっていうのは、すごくいいことだと思って、立教大学の大学院で勉強させてもらって、スポーツが健常者・しょうがい者関係なく、いい影響があると思っていました。

その中で、2001年からなんですけど、しょうがいを持つ子ども達を支援する取り組みとして「バラエティー・クラブ・ジャパン」という国際組織で、0歳から18歳までの、ありとあらゆる境遇の悪い子どもたちを支援する団体で、そのためにお金をチャリティーで集めたりしています。今回チラシを持ってきているんですけど、今年も11月30日にお台場で、開会式、閉会式をさせてもらって、3,000円の「チャリティーランニング」をやっております。今、非常にスポンサーが不足しているのと参加者が不足しているのと、要は全部不足しているんですけども。なので、皆さん、ぜひ、ホームページやファクスなんかで申し込んで頂きたいのと、学生さんたちにはボランティアでお手伝いして頂きたいというのが一つです。それからまた、今年の3月31日に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが決まりまして、それに向けての活動をしています。今回、トップアスリートを育成していかなきゃいけないといった時に、あんまりトップアスリートを真剣に育成している団体が、日本国内になかったので、僕のほうで3月31日に登記しまして、一般社団法人で「日本チャレンジドアスリート協会」なるものを作らせてもらいました。各地に僕たちが行って、しょうがいを持つ子どもたち、やる気のある子どもたちを発掘して、育成して、強化して、最後は就職までちゃんと面倒みようという、全部の流れ、四つを揃えて初めて、子どもに、ちゃんとスポーツをやれる境遇・環境を整えられると思って、活動しております。

まとめですけども、僕らがやっている一般社団法人、NPO法人なんかで、学生さんたちにいっぱい経験してもらって、そして、いっぱいチャレンジして、いっぱい失敗してもらおう。一般の企業に就職してしまったならば、失敗というのは、即、利益の損失につながります。でも、僕らのNPOや一般社団法人で、学生さんたちにやりたいことをやってもらおう。まだ、僕たちはそのケツが拭けますので、失敗して、そしてその中で、色々なものを経験したり、成功例を自分の中で自信としてつけて、それから社会に飛び立っていくということを、学生さんたちにはいつも話させて頂いています。だから、僕もそうなんですけども、ここでウダウダやっているんじゃなくて、get out thereという形で、ちょっと1歩出てみようよ。それで、良かった、失敗したっていうものを、自分の中で感覚的に得て、それを持って社会に飛び出していくような人間になって頂きたい。

日本というのは、日頃、1つのことをずっとやり続けるところがありまして、文武両道じゃないんですね。だけど、やっぱり僕は、ここ立教大学で学ばせてもらった時に、勉強することも大切、スポーツをすることも大切、働くことも大切って、もう一切無駄がないんですね。だけど、無駄がないっていうと、無駄は悪だと思われるんですね。でも、僕の人生の中で、いっぱい無駄も過ごしてきました。でも、その無駄を過ごすことで、無駄がいけないんだってことが、やっと53歳にして分かったんです。だから、無駄をちゃんとやっていく。無駄だからやらないのではなく、これをやったら無駄なんだっていうことをやってみる。つまり、色々なことをチャレンジして、経験していくっていうことを、皆さんに、今日はお伝えしたいとお話させてもらいました。ちょっと駆け足でお話しさせてもらいましたけれども、この後、懇親会までいさせて頂きますので、もし、何かありましたら、僕の方までお問い合わせ頂ければと思います。どうもありがとうございました。

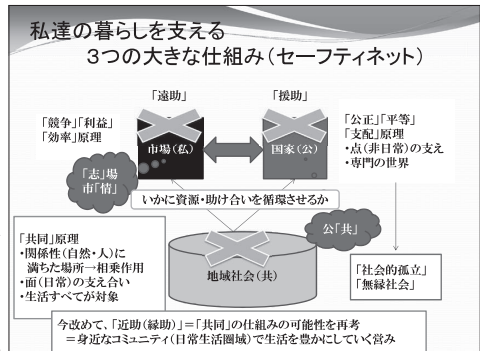
岡田 千葉さんありがとうございました。では、後ほど3人の方に、またお話し頂く時間を取りたいと思います。その前に、お三方の実践報告を、どう結び付けていくか、あくまでも私の視点からになりますが、お話しさせていただきます。皆さん方にとっても整理の時間、色々とお考えを頂く材料になれば、幸いに思います。では、お配りした資料に沿って、『3つの講演（実践）を結ぶ視座・枠組み～「社会的孤立」を切り口に～』というお話をさせていただきます。

まず、「孤立」という切り口でお話を始めたいと思います。辞典で孤立という言葉を見てみますと、他から1つだけ分離している、1人だけ離れている、つまり助けが求められないという状況です。要するに、生活困難、またはその予備軍、このような意味合いの言葉になっております。このように考えると、私たちは長い人生、そしてその変化の中で、色々な孤立リスクを抱えています。例えば、高橋亜美さんのお話で言えば、幼少期の段階で家族という基盤を持たないこと、そこを十分にケアできるかということが孤立リスクのひとつとして出てきます。ただ、そのリスクも、変化を乗り越えていく過程で、その人の力になっていったりもし、人生とは、「変化の中、常に誰かに支えられ、見守られしながら、その過程で常に新しい生き方を作り上げ、高めていく過程」だと考えることができるかと思えます。

一方、福祉という言葉は、これは「ふだんのくらしのしあわせ」と言われる通り、暮らしが断ち切られることなく、そっとそれを支えていくという営みです。そして地域福祉とは、それを地域住民自身が主体となって、一人一人がそういう行いをしていくということになります。

この上でもう一度、孤立という言葉に戻りますと、何故人が孤立したり、生活困難に陥るかという、本来であれば、社会の誰かに・何かに支えられる仕組みがあるが、それが機能的に阻害されている状況が孤立だということになります。ラウンタリー、タウンゼントという方々の研究以降、孤独 (Loneliness) と孤立 (Isolation) は別だという区別がされています。つまり、孤独というのは主観的なものですが、孤立とは社会が作り出している状況です。物理的の孤立があり、人間関係の孤立があり、心理的の孤立がある、そのように積み上がっていくという認識もあります。

では、その人が孤立せざるを得ない構造を、一体何が作りだしているのかということを考えてみたいのが、この図になります。非常に単純に考えると、私たちは、助け・助けられ、物理的な資源や人間関係的な支援をどう循環させて暮らしを成り立たせていくのか。その経路として、大きく3つ考えられるのが、「市場」と「国家」、そして「地域社会」です。



※大濱裕 (2007) 『参加型地域社会開発の理論と実践』、内山節 (2010) 『共同体の基礎理論』などを参考に作成

これはもう、各々が重要な経路であり、セーフティネットそのものであると考えられますが、それぞれにそれを動かす原理が全く異なっています。すなわち、市場は「競争」や「利益」で動く。ものすごくパワフルで効率的ですが、高橋優子さんのお話のように、お金を介して距離が遠のいて、関係が見えない中で、逆に、人や自然を、この市場という仕組みを回すことで痛めつけてしまう。そういう側面が、近頃、露わになっています。そして、国家という仕組みも、「公正」「平等」を原理とするが故に、なかなか手が回らない状況がある。

今の私たちの状況を考えると、昔はこの一番下にある「共同」を原理とする、地域社会というセーフティネットの存在が大きかったわけです。小川町には実際これが今も存在するわけですが、なかなか私たちには、地域といってもピンとこないものがあります。では、私たちの暮らしを回す経路として何がメインかというと、やはりお金を稼ぎ、消費して暮らしていく「市場」が主となっています。ところが、今起きていることは、この市場という仕組みが格差的となり、なかなか一人一人に必要な資源が行き渡らない状況になっている。本来ならば、それを補正する仕組みというのが国家であり、社会保障ですが、これも、やはり、お金を元手とするところで、市場と依存関係にあります。結果、これらの仕組みは共倒れ状態で、どのセーフティネットにも引っ掛からない人たちが、社会的な



つけられるかがポイントになってきます。そして一番の限界としては、やはり専門家といえども、四六時中その人と暮らしているわけではないので、「アウトリーチ」といっても、どうしても事後的な対応にならざるを得ないということです。やはり、面で見守る・支え合うという相互扶助の関係をある程度広げていかなければ、これからの超高齢社会・人口減少社会の下ではもうもたないだろうと思います。

ある種、住民と専門家の間に立っているのが民生・児童委員さんですが、この方々も、今かなり負担が加重になっていて、担当するエリアも広い。主な対象も児童と高齢者で、しょうがい者や貧困の問題にはなかなか関与できないというところが、最近の課題になっています。

これらを踏まえての地域の可能性ですが、そうはいっても私たちの意識は地域から離れているし、働いていれば「寝に帰る場所」が地域であったりするのが実情です。そこで意外と、まち歩きだとか、楽しい活動から入って地域に親しむことが入り口になると思いますが、先ほどのお茶会を例にあげれば、ただ集まって楽しむ、知り合いを作るというだけではなくて、多少、生活機能の補完というか、お互いに支え合うことで生活問題の予防や専門窓口へのつなぎ役としての「クッション」になるということも、これからは大切になってくるのだと思います。

もう1つ「地域福祉コーディネーター」という、名称は様々ですが、やはり、住民の世界と専門家の世界を橋渡しする役割が、今最も課題になっているところであろうと思います。これまでの福祉の反省として、その人その人に必要な支援、大切な人間関係というのは人それぞれでそれはフォーマルな支援に限らないものですが、それらを考慮せずに専門家の世界に丸投げてしてきたという側面があります。やはり地域で共同解決すべき課題は地域に戻す、そのことで地域の関係性や自力を育んでいくことが大切ですし、専門家の世界が今後なかなか広がっていかない状況にある中で、ますますここの接点の付け方が重要になってくると思います。

最後にもう1つ。先ほど、市場経済の仕組みがだんだん格差的、排他的になっているとお話をしましたが、この点で、生きることの根本にある自然との関わりや、自分たちの食糧・水、安全をどう確保するか。これまで福祉の射程になかなか入ってこなかった領域ですが、住民と専門家の接点だけではなく、人と自然、人と市場との関係にどう折り合いをつけるかということが、これからの福祉において鍵になってくるのかなと思っています。

以上、スライドを基にざっとお話をさせていただきましたが、このような枠組みで3人の方のご報告を捉えなおしますと、まさに、高橋優子さんの小川町での活動が、生産基盤、生活の基盤である地域、また、市場経済との距離の取り方を含めて福祉を考える重要なヒントを与えてくれるものと思います。

また、高橋亜美さんの活動は、それこそ、ここに「排除される人」と言葉では書きましたが、亜美さんが仰っていたように、色々と資源はあるけれども、あるだけではその人にとっての資源とはならない。何であろうと、その人の生活の現実から出発する。瀬戸際で崩れそうな基盤と一緒に立って、築き直していく。まさにソーシャルワーカーの動きをされておられました。それこそがセーフティネットといえる、社会的な取り組みを見せられた気持ちが致します。

最後に、千葉さんからは、しょうがい当事者となった瞬間、まさに孤立リスクを抱えた瞬間のお話を頂きました。けれども、本当に、先ほどの映像やお話その中で感じたのは、とにかく、社会的な壁を作り出すのも自分ですし、また、乗り越えていくのも自分なんだなということ、支援というものの一番のベースはその人自身だということ、あらためて教えて頂いたような気がします。この後、「共生社会」という観点で、少し補足を頂ければ、ありがたいと思います。

このように3人の方々の実践を見ていきますと、既存の価値や大きな仕組みに覆い尽くされないで、とにかく、自然も含めての人、その側に立ち続け、そういった仕組みをリメイクする動き、そこに共通性がみられたのかとも思っています。

それでは、シンポジウムの時間に移りたいと思いますので、高橋亜美さん、優子さん、千葉さん、前のほうによろしくお願い致します。

ここからはシンポジウム形式で、少しのお時間ですが、進めていきたいと思えます。シンポジウムというよりも、お三方が互いに影響を受けた部分ですとか、伝え切れなかった部分を補足頂きたいと思えますが、まず、亜美さんと優子さんのお話は、相互補完的な実践だったのかなと思います。高橋亜美さんのほうからは、亜美さんの中で、「地域」とは一体どういう存在なのかということと、逆に、優子さんのほうからは、亜美さんの実践に見られるような、社会的に排除されている方の存在に対して、ご自身の地域での実践がどのような意味を持っているのか、というところをお話し頂ければと思います。そして千葉さんのほうからは、先ほども、ちょっと触れましたけれども、アスリート、また、しょうがい当事者、さらにはしょうがいをもった子ども達の支援をされているお立場から、「共生社会」という観点でみた時に、今日本がどういう位置にあるのかということも、ぜひ、付け加えてお話し頂ければと思います。順番に高橋亜美さんのほうから、お願いいたします。

**高橋亜美** 地域ってすごく難しいと思っております、本当に地域が家庭にもなり得るし、つながりや希望を見いだす、希望となる一助にもなると思っています。ただ、私が支援させてもらってきた親や子どもたち、まず虐待の環境の中で生き

てきた子どもたちが、基本的に皆東京で暮らしていて、多くの子が集合住宅、都営のアパートなどで生活していて、上にも下にも、右にも左にも住んでいる人はいるんだけど、そこで餓死しそうになったりとか、その中で、10年以上保護をされずに、暴力を受け続けたりしている状況がある。そうすると、やっぱり、相談窓口と一緒に、そこに人がいればいいというわけではないというか、人が自然に集まっていたらそれで地域が生きてくるとか、動いていくかっていうと、決してそうではなくて、そこを動かす力であったり、それを動かそうとする意識だとかがないと、結局機能しない。見事に、機能しないままあるんだなって。不思議なくらい人がいても、地域地域っていうけれど、地域って何だろうかって思わせられることが、度々ありました。

でも、そうした中で、じゃあ全く地域が機能していないかというところではなくて、今日の優子さんのお話であったり、生活保護の世帯とか貧困家庭の子どもたちに夕ご飯をどうぞってところから始めた活動とか、色々な取り組みがある。そういうふうに、活動の中心になる人や場所や団体や、そういう人の気持ちから、意気込みから、思いから発生していくもの、本当に地域を動かそう、やっついこうとなると、こんなにすごいサポートになるんだなど。お給料をもらって、福祉の支援や何だとやっているところよりも、よっぽど、その子どもたちの命の、その家庭の命の支えになるんだっていう活動もみさせてもらっています。難しいけれど、意識を持ってやれば、いろんな突破口が見えてくるのかな。でも、安易に地域が大事っていうのも、あんまり言えないというか。はがゆい思いで、いつもいます。

**岡田** ありがとうございます。では、それを受けて優子さんの方からお願いします。

**高橋優子** そうですね。先ほど言いましたように、有機的福祉というところで私たちは、地域で、本当にお金がなくても必要とされて、人間として死んでいきたいといった思いで、そういう関係を作りたいと思ってやっていますね。やっぱり人間の幸せって何だろうという時に、自分が必要とされているということを感じる時が、一番生きている喜びがあるんじゃないかと思えますね。小川町で有機農業をやりたいという人は、自分が体を壊したことで食べるものが大事だと分かったから自分の食べるものは自分で作ろうと決意してやってくる人たち、それから会社に就職したけど組織に適合できなくて、人とのコミュニケーションが不安で、自分で出来る農業をやりたいとやってくる人たちが、だんだん多くなっています。

その時に、やっぱり私は先ほど言ったように、生きる喜び、幸せというところで、自分で自分の食べる物を作る喜び、自分の手が創造する喜びを、もう1回再



発見してほしいと思います。自分で種をまいたものが成長していく。それが、自分の体をつくる。自分が自然の中に生かされている。その実感が湧いた時に、自分が命をおろそかにできない、そしてまた自然をおろそかにできないってことが分かんと思うんですね。だから、そういう意味で、農業というものを捉えて頂けたらというふうに思います。本当に、自分の手で創造する喜びを1度得ると、感覚的に生きててよかったと感じると思うんですね。そういうことを一緒に学べたらいいと思っています。

**岡田** ありがとうございます。千葉さん、お願いします。

**千葉** 僕は思うんですけども、自分がしょうがい者になって色々感づく、気付く、見える所、見えない所が出てきた時に、今の世の中って、色々やりたいこと、それから、やんなきゃいけないこと、やりたくないこと、そういうのが情報として錯綜していて、それをいかにキャッチして削いでいきながら、自分がやりたいことやんなきゃいけないことを見据えていった時に、その情報をキャッチするツールみたいなものも変わってきている。この間も僕のイベントなんかでQRコードって言ったらば、「おまえ、QRコード、どれだけの人がやれると思ってんだ」って言われて、はっと気付いた。ファクスとか、まだまだ電話とか、アナログの人たちもいっぱいいるわけです、僕も含めて。そうすると、こっちがやりたいことを押し付けるのではなくて、色々な人にその場その場で合うような、ユーザーさん、クライアントさんからの色々な意見を聞いて、色々なことをシェイプアップしてやっていければいいと思うんですね。だから、その時代時代に合ったものと、それから時代を超越して残していかんやいけないこと、残ったものがハイブリッド的にやっていければ、やりたい人と、その情報をキャッチしたい人がリンクして、色々なことがスーッと血流が良くなるようにうまくいくんじゃないかなと思いました。

それからあと、先ほどお話しし忘れたんですけど、僕はしょうがいを持っている子どもたちを色々サポートしてきまして、しょうがいを持っている子どもたちっていうと、日頃、やれないとか、できないって思ってたんです。でもそれはとんでもない大間違いでした。しょうがいを持っている子どもたちは、やる機会がなかっただけなんですね。だから可能性として、やる機会、チャンスさえあれば、ニコニコして、どんどんやっていくんです。それと、やる方法が分からなかったということ。例えば、「ママ。ペットボトル開けて」って、僕よりも握力のある子が、お母さんにペットボトルを開けてもらう。でも、それは、お母さんが、ペットボトルをその子に開けさせたことがなかったからであって、自分はできないんだって信じていた。けど、僕が目の前で開け方を教えてあげたら、ペットボ

トル開けられるんだとわかって、開けることが楽しくなっちゃって、一気に10本ぐらい飲みたくもないんだけど開けちゃったりとか。あと、ちょっと手が不自由な脳性まひの子どもを連れて、真冬に釣りに行ったんです。それで、「いつもだったら、ママにジャンパー着させてもらってる」っていうから、「千葉さんだったら手が不自由なんだよ。おまえ、自分で、寒いんなら着ろよ」って言ったならば、手が不自由なりに15分ぐらい、フーフー言いながら着てたんです。そしたら、やってるうちに集中して、汗ダラダラこぼれてきたんですね。で、やっとの思いでチャック閉めたら「千葉さん、暑い」って言うんです（会場：笑い）。次の日の朝まで夜通し釣りして、最初に言った言葉は、「ママ、僕、ジャンパーのジッパー開けられたんだよ」って。要は、僕も子どもを育てていますが、成長を待てるか待てないかというのも1つのファクターだと思うんですね。世の中あまりにもスピード感があり過ぎるから、それに乗らなくてもいいようなものも、1つあっていいと思うんです。すいません、長くなりました。

**岡田** ありがとうございます。では、フロアの皆さんのほうからの質問をお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

**フロア** 卒業生の大夙賀といいます。今日は、ありがとうございました。今年の学会テーマが「希望」ということで、本当に色々なお話を聞いたんですけども、せっかく皆さまにお越し頂いたので、端的に、これが希望になり得るんだ、活動を通してこういうことが一番希望になり得るんだというメッセージを頂けたら嬉しいなど。よろしくお願いします。

**岡田** 順番に、よろしくお願いします。

**高橋亜美** 私は、まず、生きてきてくれたこと、命があることに気付くということ。あの、普段支援しているなかでも、死にたい、死にたいって言うんですけど、それでも死なないでいてくれて、私はあなたが生きていてくれてありがとうって言うこと、あなたが今生きてくれていることが希望だよって思う。それが一番、自分が仕事を続けられる原点になっています。

**高橋優子** 先ほど「贈答経済」と言いましたけれども、惜しみなく与え続ける。そうしたら惜しみなく与えられるということです。本当に、自然は、理にかなっていて、私たち人間も自然の摂理、正しいことをきちんとやっていけば、希望は無限大にあると思っています。

**千葉** 自分がしょうがい者になって思うんですけど、過保護的な政策はあんまり要らない。平等なチャンスさえあれば、インフラが整っていれば、そういう意味で希望的観測としては、全ての人が、動ける、通れる、通りやすいようなものが、インフラストラクチャーとして整っていく日本になってほしいというのが希望ですね。あと個人的には、子どもは6歳なんですけど、67歳まではおやじ頑張んなきゃ駄目だなと思って。子どもが成人するまで、ちゃんと体を、自己管理をしていかなきゃいけないなと思っております。以上です。

**岡田** ありがとうございます。他に、いかがでしょうか。

…皆さん、時間を気にしてくださって、ありがとうございます。個人的にお聞きしたいことがおそらく皆さんおありかと思しますので、懇親会の会場で交流して頂ければと思います。

それではまとめになりますが、今、大冢賀さんから質問があった後ですが、今回の「希望」というテーマに対して、当初、「もう1つの価値」というキーワードで、3人の方の実践をつなぎたいという考えをもっていました。しかし、お話をお聞きしていくうちに、ちょっと間違っていたなと思ったのは、3人の方がやってらっしゃることは、全く逆のことで、つまり、王道を貫いていく、当たり前前に、こう在りたいということ貫いていらっしゃることが分かってきて…それが際だって見えてしまう、私たちが作る社会のほうがズレ出しているのだろうと思います。

その点で、3人の方は、恐らく、日々、本当に色々と大変な思いもされていると思いますが、共通して印象深かったことは、皆さんの所に取材に伺った時に、全く疲れた表情が見えないというか、エネルギーに満ちあふれているというか、私からは、そのように見えました。それで最後の質問としてお聞きしたいのは、その当たり前のこと、自分が貫きたいことをやり続ける原動力は何かということ、それと、コミュニティ福祉学部、各学科に向けてメッセージでもあれば、おひとつ頂ければと思います。高橋亜美さんからよろしいでしょうか。

**高橋亜美** 原動力…そうですね。色々志とか、格好いいこと言ったんですが、まず私が続けられるのは、きちんとお給料をもらって、きちんと休みをもらって、クライアントの体験をしっかりと聴く時間もあって、私がこういった仕事をするための、仕事としてこれは保証されているという部分。その基盤がしっかりあるというのが、やっぱり一番大事な土壤になっています。決して、私たちの仕事は、ボランティア的に行える仕事ではないので、そういったところでの、当たり前の、働く上での土壤というのがしっかりと守られた上で、適切な支援であったり、色んな気持ちの余裕であったり、アイデアであったり、想いであったりというもの

も生まれてくると思います。そこをなくしては、格好いいこと言えないというのがあるので、私にとってはそれが一番です。現実的な話ですいません。

**高橋優子** そうですね、モチベーションとしてはですね、やっぱり若い時に、良き恩師に出会ったということがやっぱりあります。恩師の背中をずっと45年間追いつけてきたということですね。やはり、自分の人生の師との出会い、また、その出会いを選択し、生み出すのは自分自身であるということ。だから、皆さんも、特にここは大学ですので、私が言いたいのは、正しいことを選択する感性を自分の中にちゃんと養っておく。そうすれば、必ず、人は助けてくれるし、希望は見えてくると思います。本当に、千葉さんが言ったように、あまりにも情報が多過ぎてですね、皆さんの感性は、実はすごく鈍っていると思います。これが正しいということを選んでできる知識、スキルを身に付けて、それを自分の心の奥に据えて、人生を歩んでいく。それが自分の人生を健やかにし、安らかにするんだと思っています。で、こんなこと言ったらあれかもしれないけど、欲張らないことですね。欲を持たないこと。欲を持つと、皆さん、人は本当によく見ているので、欲を持つと人は近寄ってきません。欲を持たないで、正しいと自分が信じることを、淡々とやり続ける、私はそれに尽きると思います。

**千葉** 原動力ということで、今、ふと考えたんですけど、子どもたち、しょうがいを持つ・持っていない子どもたちと、色々と触れ合っている時に、できないからこそ、できた時の瞬間を見た時がすごく感動的です。それから、色々な国内外で最高の経験・体験をさせてもらって、かといって、こんだけ頑張ってるやつてきたものが、例えばインフラが整備されなくて、そこら辺に寝泊まりしていたホームレスの人たちに助けてもらったとか。最低と最高を経験しちゃうと、また、もう一度、その場に行ってみたいと思って、日頃から、その努力は続けられると思うんです。だから、その最高、最低を経験したことで、毎日毎日自分の中でへこたれずに努力していくっていうこと。その全部が僕の場合は原動力になっている、モチベーションになってるのかなと思います。

**岡田** ありがとうございます。今回、導入で、トップダウンの大きな仕組みに飲まれていくような状況、というお話をさせて頂きましたが、もちろん世の中のシステムが上から下に行けば、その影響は下が受けるんですけども、案外、それを下から組みかえていく動きは可能なんだなということは実感として持ちましたし、本当に3人の方のご報告を聞きながら、何だかこう、湧き出てくるエネルギーみたいなもの感じまして、ここでお別れするのも名残惜しいですけども、少しでも会場の皆さんにとっても、また明日からそれぞれの持ち場で、具体的な希望

を紡いで、つなげていくきっかけとなる場であったなら、嬉しく、喜ばしいことかなと思います。本当にお忙しいなか、この学内学会にご協力くださいました3人の方々に、もう一度拍手をお願いいたします。会場の皆さまも2時間という時間、一緒に作ってくださってどうもありがとうございました。

(了)